別紙様式８

研　究　主　論　文　抄　録

論文題目
ギリシア古代都市メッセネの劇場の復元に関する研究

熊本大学大学院自然科学研究科　　環境共生工学専攻人間環境計画学講座
（　主任指導　　伊藤　重剛　教授　）

論文提出者　　岩田　千穂

主論文要旨

ギリシア古代都市メッセネは、前 369 年にテーバイのエパミノンダスにより建設されたとされている。本都市は、ヘレニズム時代において有力な都市国家であり、かつてはメッセニア地方の首都であった。メッセネの劇場は、メッセネ考古学協会(代表 : P. テメリス氏)が 1997 年より約 10 年間かけて発掘しているもので、近年になりようやく全貌が明らかになりつつある。発掘がひと段落した 2010 年以降は、遺構の修復作業がおこなわれている。熊本大学ギリシア古代建築調査団（団長：伊藤重剛）は、2007 年より 2012 年にかけて、建築調査担当として劇場の調査をおこなった。劇場遺構には、ギリシア、ローマ劇場双方の特徴をみることができることから、ギリシア劇場からローマ劇場へ計画変更がおこなわれた様子がわかり、ギリシアにおける劇場の発展を知る上で貴重な資料である。

本研究の目的は、メッセネの劇場における建築調査の成果をもとに、劇場の建築段階を明らかにし、各時期の建物を復元することである。また、他都市の劇場と比較分析をおこない、メッセネの劇場の建築的特徴を明らかにし、建築史的位置づけをおこなうことである。

まず、現地調査により一次資料を作成、収集した。ここで、遺構や部材の現状を明らかにした(第 2 章)。遺構・部材の観察結果より、劇場に使用した部材の一部には、他の建物の部材を転用したり、前代の建物部材を再利用したりしたものがあることがわかった。特に、舞台建物と東後壁の部材では、それが顕著である。劇場は、南北約 90m、東西約 100m で、客席が南向きに造られており、その周囲は幅約 2m の石積みの後壁で支えられている。客席の南側は、東西パロドスの壁により支えられている。客席の南側には、東西 46.6m、南北 15m の後 1 世紀に建設されたと考えられるローマ時代の舞台建物遺構がある。舞台背景となっていたスカエナエ・フロンスには 3 つのニッチがあり、それぞれのニッチ背後にはポストスケニオンへの出入口がある。舞台袖にも出入口があり、ポストスケニオンと通路でつながっている。舞台建物の東には、可動式の木造舞台背景を収納するための舞台収

納庫と思われる遺構が出土している。遺構の西端から東側の壁までの長さが 27.55 m、幅が 8.13 m である。この中に、溝が付けられた石材がレール状に並べられた遺構が、東西に平行に 3 本出土した。

次に、劇場の建物の観察の結果から、劇場の建築段階の再現を試みる(第 3 章)。建物の前後関係を判断する基準として、遺構の切りあい関係、部材の仕上げの違い、部材同士の接合のためのカスガイ穴やダボ穴の形状などが挙げられる。以上のような項目を分析した結果、メッセネの劇場の建築段階は、おそらく 4 段階だろうと考えられる。第 1 期は創建期で、年代は前 4 世紀半ば以降が想定される。この時期には、メッセネの市城壁と非常によく似た石材や石積みが採用されている西後壁や、オルケストラ、客席、舞台建物などにより基本的な劇場の形が形成されたと考えられる。パロドスの壁は、ポロス材を使用した壁がこの時期に作られたと考えられる。劇場各部にはポロス材が多く使われたと考えられ、座席や舞台建物もポロス材で構成されたと推測される。舞台建物は、プロスケニオンに半円柱付き角柱などが立っていたと考えられる。第 2 期は東パロドスの南に可動式舞台収納庫が建設された段階で、前 3 世紀半ば以降のヘレニズム期が想定される。この段階では、可動式舞台建物の建設により、東パロドスのポロス材製壁の大部分が隠されたと考えられる。また、この時期には、新しい座席が作成された可能性があり、同遺跡内のエクレシアステリオン(民会場)やスタディオン(競技場)でも使用されている高さ幅ともに 0.35m の石灰岩製座席部材がそれにあたると推察される。第 3 期は、ローマ時代になり、劇場がギリシア劇場からローマ劇場へと計画変更された段階である。この段階には、ヘレニズム期に建設された可動式舞台収納庫やレールが取り壊され、ローマ様式の舞台建物が建てられた。この時期には、すでに西パロドスの建設が完了していたのではないかと推測される。東パロドスは、可動式舞台収納庫の北壁のみが残され、東および南壁は基礎部分を残して取り壊された。取り外された部材は、おそらく舞台建物や東後壁に再利用されたと考えられる。最後の第 4 期は、ローマ時代に改築がおこなわれた段階である。この段階が、本建築が劇場として使用された最終段階と言える。この段階で、舞台建物のプロスケニオンの壁が煉瓦造りになったと考えられる。

続いて、一次資料にもとづき、劇場の建物の復元考察をおこなう(第 4 章)。第 1 期、第 2 期の劇場建築に関しては、遺構の保存状態が悪いために、詳細な復元図を書くことはできなかった。本章で詳細な復元分析ができたのは、劇場としての最終段階である第 4 段階の建物である。第 4 段階の建物復元には、基本的には遺構や建築部材の実測結果や観察結果を根拠におこない、まったく痕跡のない部分については他の劇場の例を参考に推測復元をおこなった。

ローマ時代の客席部は、東西対称ではなく、東後壁が円弧をなすような形、西後壁が放物線状の一部をなすような形となっていた。客席は 3 層構成で、2 本の周回通路が存在した可能性が高い。また、客席第 1 層の階段通路は 10 本で客席が 11 区画に分割されていた。座席は 3 種類あり、その中にはおそらくヘレニズム時代に使用されていた部材が含まれて

いた。座席以外にも、ローマ時代のパロドスの壁は、部分的にヘレニズム期のパロドスの壁の部材を再利用していることがわかった。また、後壁には各周回通路へ続く別々の出入口が設けられており、外部から客席へ出入りすることができた。客席勾配に関しては、現状で残る客席西中腹の石材列などの遺構の位置座標から復元した客席勾配が 21.78 度、階段通路やパロドス壁の壁部材上面と笠木部材接合面の傾斜から予想される客席勾配がおよそ 21～22 度である。この値は、劇場の平均的な客席勾配と比較するとかなり緩やかで、その要因として、メッセネの劇場が建てられた斜面の傾斜が緩やかで、おそらくローマ劇場に改築する際にも､少なくとも第１層は勾配の変更をおこなわなかったことが考えられる。

ローマ時代の舞台建物については、遺構の状況から大まかな平面形状を復元し、スカエナエ・フロンスの列柱については、建築部材の形状や実測値から推測復元した。実測した建築部材を大まかなオーダーの違いや寸法の違いに注目すると、各部材が以下のように分類される。① 柱身は、高さにより４種類に分類される。② 礎盤は、その上面直径と上に乗る円柱の底面直径との関係から、４種類に分類される。③ 柱頭は、コリント式、イオニア式､大小のロータス･アカンサス式柱頭２種の計４種に分類される。④ アーキトレイブ・フリーズ部材が高さにより２種に分類される。⑤ ゲイソンが装飾の有無により２種類に分類される。以上のように部材を２～４種類に分類できるので、スカエナエ･フロンスは２層であった可能性が高い。また、スカエナエ・フロンスにはニッチがあるので、同じ階層に高さが異なる２種類の柱があった可能性が高い。２種類の柱とはすなわち、ニッチに据えられる柱と、スケーネの躯体上に据えられる柱である。つまり、オーダーの組み合わせが２通り、柱の組み合わせが４通りとなる。

ウィトルウィウスは、著書の中で２階建て及び３階建てのスカエナエ・フロンスの各部寸法の比例関係に言及しており、それによると、スカエナエ・フロンスは 1 階の高さが高くなり、2 階の高さが低くなる。これは、おそらくメッセネの劇場にもあてはまり、アーキトレイブ・フリーズ部材とゲイソン部材は大きさが明らかに 2 種類あることから、メッセネのスカエナエ・フロンスは 2 階建で、大きな部材が 1 階、小さな部材が 2 階に相当すると考えられる。

以上のことから、スカエナエ・フロンスのオーダー各部の寸法を平均値で算出し、その結果と各部材の分析結果を元に復元図を作成した。建物の東西全長 46.6m(約 160ft)、南北全長 14.4m(約 50ft)で、前面に 29.47m(約 100ft)の舞台があり、その背後に 2 階建のスカエナエ・フロンスが立ちあがっていた。アーキトレイブ・フリーズ部材と遺構の寸法より、ポディウム正面列柱は３柱間であったと考えられる。一方、各ニッチの床面には、２つのペデスタルがあり、その上には円柱が配置された。ここには、ポディウムに立っていた柱よりも背の高い柱が置かれた。また、その背後には付け柱が 2 本あり、それらとペデスタルに乗っていた円柱とは、梁で接続していた。ニッチには、より豪華に見せるために、ポディウムよりも装飾豊かな部材を使用したと考えられる。スカエナエ・フロンスのニッチの前面には、ステップがあり、ここからプロスケニオン前面の壁へ南北方向に床梁あるいは根太を架け、その上に床板を張ったと推測される。

最後に、他の劇場との比較分析をおこなう(第 5 章)。劇場の規模としては、ギリシアの中では最大級とは言えないが、大規模と言うことができる。また、ローマ時代のスカエナエ・フロンスのオーダーは、一般的にコリント式オーダーが使用されることが多いが、メッセネの場合、コリント式に加えてロータス・アカンサス式オーダーが使用されている点で特徴的である。古い舞台建物に関しては、可動式舞台建物跡が発見されている劇場は少なく、メッセネ以外にはメガロポリス、スパルタのみであり、すべてペロポネソス半島南東部に位置することから、仮設の舞台建物の一種としてこの地域に特徴的なものとみることもできるが、想像の域を出ない。